

世界に羽ばたけ！ 米山学友⑬

懸け橋の意味を伝えたい

教壇に立つティンさん(写真右)と復興支援に協力し建設中の小学校



ミャンマーで何とか出版にこぎつけると、その年のミャンマー国民文学賞(青年文学部門)に輝きました。

「この本が、ミャンマー人に感動を生み、日本に対する友好が深まることを感じたとき、留学生たちがよく口にする“両国の懸け橋”という言葉の意味を初めて実感しました」と、ティンさんは語ります。

ある日本人患者との出会い

ミャンマー中部の町メイクテーラの医師であった父の勧めで、ティンさんは日本語の勉強を始めました。旧日本軍戦没者の慰霊に、多くの日本人が訪れるこの町では、体調を崩した人が来院することもあったからです。

ある日、1人の日本人患者が来院し、ティンさんが通訳を務めました。戦時中2年間ミャンマーにいた、というその人は、新潟県に住むロータリアンでした。帰国後に文通が始まり、1993年、そのロータリアンの招待で、ティンさんは初来日。ロータリークラブの例会に出席したり、ローターアクターたちとハイキングに参加したりと、どれも忘れられない思い出となりました。

「日本に留学したい」と、真剣に考えたティンさんは、その年のうちに再来日を果たし、その後、神戸大学大学院に進学しました。

翻訳を通じて実感した“懸け橋”の意味

修士課程在学中の98年春、小説『ビルマの豎琴』の主人公のモデルと言われる故・中村一雄(ペンネーム・武者一雄)氏から依頼を受け、氏の著書『ビルマの耳飾り』の翻訳を手がけたことが、ティンさんにとって、人生の指針を決める大きなきっかけとなりました。

戦時中の日本兵とミャンマーの子どもたちとの間に芽生えた友情と絆を描いたこの作品は、講談社児童文学新人賞を受賞。ティンさんも「母国の人々にぜひ読んでほしい」と、大学の休みをすべて費やし翻訳に尽力しました。

「良い人材を育て、日本との良い関係をつくる」。その実現のために、ティンさんは、かねてからの夢であった語学学校の設立に乗り出すことにしました。手探りでの準備中、ティンさんの情熱に応じてくれたのは、米山記念奨学生時代に交流した多くのロータリークラブでした。

多くの支援を得て語学学校を設立

米山記念奨学生になったのは修士課程1年のとき。世話クラブの加古川中央ロータリークラブの例会では最初、緊張のあまり食事もうまくのどを通りませんでした。カウンセラーの堀公行会員が家族のように温かく世話してくれたことから、徐々に持ち前の社交性を発揮し、近隣クラブの卓話にも出かけ、行事に参加し、多くのクラブとの交流を深めました。学友になってからも、卓話で「母国に日本語学校を設立したい」と夢を伝えると、コピー機や発電機、ノートパソコンなど、学校設立に必要な支援がいくつものクラブから寄せられました。

学校設立に当たっては、役所の申請に時間がかかったり、賄賂の要求に戸惑ったりと困難の連続でしたが、2001年9月、ヤンゴンに念願の「ティンミャンマーランゲージセンター」を設立。博士号の取得後帰国し、05年から同校の校長に就任しました。

ミャンマーに日本語を教える語学学校はたくさんありますが、ティンさんから見ると、既存の教材はどれも満足のものではなく、国際交流基金や日本のNGOの支援を得て、新しい日本語教材を出版。最新の日本語教授法や独自教材を取り入れた授業に引かれ、留学を目指



ミャンマーでは日本語が英語の次に人気が高い外国語であり、最大都市ヤンゴンにはさまざまな日本語学校が設立されています。中でも米山学友のティン・エイ・エイ・コさんが設立した「ティンミャンマーランゲージセンター」は、1クラス5人までの徹底した少人数制と、独自に開発された教材やカリキュラムの質の良さで定評があり、日本語スピーチコンテストの上位入賞者を多く輩出するなど、成果を上げています。

多くの若者がティンさんの学校の門をたたきます。

「彼らが年間を通じて日本語の学習を続けられるよう、日本の専門学校や大学と提携した取り組みを、今後考えていきたい」とティンさんは熱く語ります。

震災で学んだ助け合いの精神

08年5月、サイクロン・ナルギスがエーヤワディー川デルタ地帯を直撃。死者・行方不明者13万8,000人、国連の推計で被災者総数は250万人に上ると言われ、ミャンマー史上最悪の災害がもたらされました。ヤンゴン市内でも樹木が倒れて家が全壊し、断水、食料不足などの被害が多発。その光景は、ティンさんが親しくしていたミャンマー出身の留学生を死傷させた阪神・淡路大震災の記憶を呼び起こさせるものでした。震災のとき、救援活動や重傷の友人のケア、友人の遺族の世話に奔走したティンさん。このとき感じた「助け合い」の思いが、母国の危機に際し再燃しました。

ティンさんは、すぐにサイクロンで壊滅的な被害を受けた農村部に赴き、食料や飲料水、衣服を配布。また、個々の被災状況に応じて金額を分けた義援金を、一軒ずつ訪問して被災者に配りました。神戸の震災後、人々が冷静に対処したように、混乱や暴動が起きないよう確実に必要としているものを人々に届けること、また、平等に接することを心がけた、と言います。

「自分もいつかロータリアンのように、奉仕を通じて

プロフィール

ティン・エイ・エイ・コさん

(1995 - 96年 / 加古川中央RC) ミャンマー出身。1993年来日。95年に神戸大学大学院入学、2003年に文化構造論で博士号を取得。05年、ヤンゴンに設立したティンミャンマーランゲージセンター校長に就任。サイクロン被害の復興支援にも尽力している。



人の輪をつくり、人の世話をする力がある人になりたい」。災害からの復興支援に当たること、彼女は今、米山記念奨学生のとくに漠然と考えていた将来の姿に、自分を重ねつつあります。

現在も日本のNGOと協力して、海辺の貧しい村の全壊した小学校の再建に携わっているティンさん。未来をつくる子どもたちのため、「懸け橋」となる人材を育てるため、彼女のチャレンジはこれからも続きます。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

マレーシアの若者の日本留学を支える米山学友



日本留学の説明を行う鄧さん

マレーシアの米山学友、^{デンキウイ}鄧奇偉さん(2003 - 05 / 横浜戸塚中央RC)は2006年、故郷のパナン島で「三笠野日本語&留学センター」を設立。短期間で高レベルの日本語が習得できる留学準備コースのほか、初級から上級までの日本語クラス、日本語能力試験対策コースを備え、今年年間200人以上(延べ500人以上)の学生、そして日系企業に勤める社会人が、ここで学んでいます。学校名の「三笠」は日露戦争でロシア海軍を破った戦艦名にちなんだもので、「時代は欧米よりも日本、との信念を込めた」と言います。ほかにも日本人高校生との交流会を開いたり、留学説明会を開催するなど、草の根の交流、そして日本留学を積極的に推進しています。